

F-39 知的退行を認め、R T - P C R 法にて髄液および末梢血単核球から麻疹ウイルスの gene が検出された難治性てんかんの一例

東京医科大学小児科

○宮島 祐、星加明徳、河島尚志、荻原正明、山田直人、
王 伝育、木ノ上啓子、武隈孝治

[目的] 難治性てんかんの原因の一つとしてウイルスによる慢性脳炎が示唆されているが、未だ不明瞭な点が多い。今回我々は知的退行を認めた難治性前頭葉てんかん男児例において、髄液および末梢血単核球より麻疹ウイルスの gene を検出しえたので報告する。

[症例] 14歳、男児。在胎・周産期・発達歴に特記事項なし。麻疹の自然罹患歴はなく、予防接種を1歳7か月時に受けている。6歳時急性脳炎にて痙攣重積をみとめ東京医大病院入院。バルビツレート療法にて抑制する。2か月後より意識減損を伴う一点凝視、左顔面から左上肢の partial myoclonus の反復出現を認め、脳波では右前頭、前側頭部優位に焦点性棘徐波および不規則高電位徐波の持続的出現と全般性棘徐波、多棘徐波を認めた。種々抗痙攣剤治療に抵抗し、さらに左側優位の上肢を強直挙上する発作、時に転倒を認めるようになり、著しい知的退行を認め、現在自発言語は乏しく、排尿自立していない。14歳時施行の髄液麻疹抗体価(NT, HI, IgG)陰性、オリゴクローナル IgG バンド陰性であるが、RT-PCR 法にて髄液および末梢血単核球より麻疹ウイルスの gene を検出し、血清麻疹 HI 抗体価 64 倍、IgG(EIA) 81.6 陽性を認めた。MRI - CT では右前頭葉優位の軽度脳萎縮を認め、SPECT では全般性の血流低下を認めた。眼科的検索では異常を認めていない。現在 γ -globulin 療法、Inosiplex 等免疫学的治療の併用を試みている。

[結論] 麻疹の自然罹患歴のない本症例においてRT-PCR 法にて麻疹ウイルスの gene を検出した。臨床症状および検査所見では Rasmussen症候群、SSPE に合致しないものの麻疹ウイルスの関与が疑われる興味ある症例と思われた。

F-40 親からみたてんかんをもつ子の性格
兄弟および他の慢性疾患との比較

神奈川県立こども医療センター神経内科

現 横浜療育園

○三宅捷太

てんかんをもつ子には特有の性格があると言われている。13年間隔の2回の親への調査結果を先の本学会で報告した。その結果は固執傾向に関して13年前よりも減少し、それは発作頻度や発作型に関連しないというものであった。今回、てんかんをもつ子の兄弟と、他の慢性疾患や一般の急性疾患との比較を行って性格を形成する原因を検討した。

[対象] 当センターを受診中の中等症以上のてんかんと喘息のそれぞれ84名と101名、一般病院を受診した急性疾患53名、当センターの重心児34名およびSSPE青空の会と無痛無汗症の会のそれぞれ48名と36名である。多答選択一部記述式アンケートを郵送し57~85%の回答を得た。

[結果] 本人の性格について、急性で親和傾向が130%と極端に高率で、その他の項目は35~40%と一定であった。てんかんと喘息では固執傾向(77%、64%)と多動傾向(50%、48%)が高率で、急性疾患(36%、21%)に有意差を示した。その他の性格傾向はてんかんで若干高い遲鈍傾向を示した他は喘息とほぼ同様であった。しかし情緒不安と受動傾向は急性疾患とほぼ同率であった。

兄弟の性格はてんかんで固執傾向が上の兄弟でも下でも(66%48%)、喘息の36%39%より高率であった。そしててんかんでは下の兄弟で多動と情緒不安傾向をより高率に認めた。またどの群でも親和傾向が最高であった。

[考察] てんかんと喘息の子どもの性格には類似点が多く、てんかんに固有の性格ではなく慢性疾患特有の性格と思われた。てんかんをもつ子の親は喘息に比較して、「人生觀が変わり」「家族がまとまなくては」と考える親が多い。そして親は本人とは逆に兄弟に対して厳しく接し、甘やかしやかまい過ぎにせず、より一貫した様をしていた。性格形成にはこうした親の本人・兄弟への接し方にも大きな原因があると推測された。

本研究より日常の生活指導を心理面を配慮してより木目細かくする必要性を感じた。